

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25243005

研究課題名(和文) 東南アジアにおけるケアの社会基盤：〈つながり〉に基づく実践の動態に関する研究

研究課題名(英文) The Social Bases of Care in Southeast Asia: Study of the Dynamism of Practice Based on Relatedness

研究代表者

速水 洋子 (HAYAMI, Yoko)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号：60283660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,400,000円

研究成果の概要(和文)：東南アジアでは、制度政策はケアについては、家族とコミュニティに大きく依存する中で、ケアは実際には公民協私の4領域が交差する様態で担われている。また、ケアを必要とする者の独居を良しとしない規範が強い一方で、実態として独居を選択しながら、居住空間を超えてケアが実践される形でネットワークは維持されている。ケアは社会関係の実践に埋め込まれたものとして、当該社会における社会関係・相互性の規範と不可分である。

研究成果の概要(英文)：In Southeast Asia, administrative policy regarding care (especially for the aged) is dependent primarily on family and community. The top-down policies are in fact practiced not within one of four divisions (state, market, civic and family), but across them. Regarding residential pattern supporting care, there is a tendency towards less co-habitation with those in need of care, yet, care is practiced across household bounds at the same time that separate residence is preferred. As practice embedded in social relationships, care is embedded in cultural values and social norms.

研究分野：地域研究

キーワード：ケア 東南アジア 社会保障 家族 コミュニティ 少子高齢化

## 1. 研究開始当初の背景

### 1) 先進産業社会中心のケア議論と東南アジア

日本を含む先進産業社会では、家族が再生産の場として乳幼児や老人などのケアを担ってきた。少子高齢化とともにそのニーズは高まる一方で、離婚率の増加や育児破綻など、肝心の家族は崩壊の危機が喧伝されて久しく、もはやケアを担いきれなくなっている。欧米のフェミニスト論者は、生産労働を中心とした社会編成の中でケア労働が家族という私的領域で不可視化され周縁化されてきたと指摘し、ケアの価値と実践を公的領域へ広げることを提唱した (Held, V. 2006 *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global*. Oxford University Press., Tronto, J. 1993 *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*. Routledge)。ケアの価値は狭義の再生産領域に閉じ込められるのではなく、広く政治・経済を含む社会諸領域を包含すべきであるという主張である。日本でも、[私] (家族) 領域がケアの行きづまりをみせる一方、[官] (国家/地方行政) に依存することはできず、[民] (市場) のみでは十分に機能できない中で、[協] (市民) 領域の重要性が論じられている (上野千鶴子 2011 『ケアの社会学』太田出版、cf. 広井良典 2010. 『コミュニティを問いなおす』2009 ちくま新書)。いずれの議論もケアの場を私的・再生産領域から広げることを企図している。

こうした先進国のケアの議論では、社会保障制度が遅れている東南アジアは参照すべき対象とされてこなかった。申請者は、東南アジアから、学ぶことがあるのではないかと問うことから始めた (2012 『人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』速水他編 序章)。本研究では、そもそも公的制度は遅れる一方で、私的領域の囲い込みが必ずしも同様にはみられない東南アジア社会において、「公私」あるいは「官民私協」領域の諸前提を取り払い、ケアがいかに社会に担われ実践されているかを問う。

### (2) ケアからみた東南アジアの社会編成

東南アジアでは、社会編成の基盤に係り性(つながり)の原理があり、二者間関係の累積的広がりのネットワークが社会組織の特徴とされてきた。中でも家族圏と称された家族を核とする関係の広がりや、私的・公的両領域の境界の曖昧さを端的に示すものであった (立本成文 2000 『家族圏と地域研究』京大出版会)。そうした社会でケアを担うのは、やはり近親者であるが、[私] 領域は小さな閉じた単位としての「家族」にとどまるのか。そこで、市場や地方自治体とも融通しあう在地社会の基盤にあるつながりはもはや有効ではないのか。そうした圏の広がりや、社会資本の

豊かさは、制度の脆弱を補っているのか。そこで、申請者は、これまでの東南アジアの家族に関する研究 (2012 *The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology and Practice* 速水他編) を足掛かりに、新たなニーズに応じるケア実践の実態から、従来言われてきた東南アジアにおける社会編成の特質とその新たな動態について考察する。

### (3) 東南アジア地域における新たなケア・ニーズに対応する制度と実践

ASEAN 4 と呼ばれる国々を筆頭に、経済成長と産業化、国内外の経済格差拡大が著しい中、少子高齢化が進行し、都市化や移民流入による激しい人口変動を経験している。グローバル・ケア・チェーンの末端にあってケア・ワーカー送出国となっている国々でも、自国内のケア・ニーズは二の次になっている。家族圏が縮小する一方で、ケアの制度や政策は未だ不十分で、女性の三重役割へと皺寄せが生じている。新たに生じている自国内のニーズに対し、家族圏や農村共同体など従来の親密圏と接合しながら、農村女性の互助組織、障害者や HIV 陽性者の自助グループ (田辺繁治 2008 『ケアのコミュニティ 北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』岩波書店)、宗教などによる社会活動、移動労働者ネットワーク等、多様なつながりに基づくコミュニティやネットワークの形で新たなケアの場を形成している局面もみられる。社会保障制度の欠如や、市場が提供するサービスへのアクセス困難に対して、関係性の広がりの中でニーズに対処する実践がみられる。それらは行政に訴える声になり、社会編成の変容をもたらす。本課題のメンバーの多くがこのような局面に近年ふれてきている。産業化の歩調も過程も先進諸国とは異なる東南アジア社会では、ケア・ニーズの増大は、どのような応答を生み出しているのかを探求する。

## 2. 研究の目的

本研究では広義のケアの価値を念頭に置きつつ、あくまで実践を重視し、以下の「ケア」の定義からスタートする。「依存的な存在たる人の身体的かつ情緒的ニーズを一定の規範的・経済的・社会的枠組のもとで満たすことに関わる行為と関係」。

東南アジアの社会保障制度は、人口構造の変動の著しい中で注目されはじめた (大泉啓一郎 2007 『老いてゆくアジア 繁栄の構図が変わるとき』中公新書)。しかし、制度の遅れや経済的基盤の困難が強調される一方、増大するケア・ニーズに対応する様々な現場の実践についてはいまだ不明である。また、制度政策面も、実践面も、域内諸国の歩みは大きく異なり、それぞれの段階において考察しつつ比較する必要がある。したが

って本研究では、

各国の制度政策の現状を把握し比較する。メンバー各自が、家族・親族、地域の文脈で研究対象の場を設定し、いかなるケア・ニーズに対しケア実践の場や関係がどのように形成され変容しているかを明らかにする。上からの制度の実態化と、下からのケアの実践の間にどのような対応や齟齬があり、どのような新たな運動などがみられるのか、動態を明らかにする。各国の状況を比較し、ケアの社会基盤から東南アジア社会の動態について考察する。

従来から社会編成における「関係性」の重要性が言われてきた東南アジアにおいてケアを考察することで、ケアの理解に新しい視点をもたらし、同時に東南アジアの社会編成の特質についての動態的な理解を提示することを目指す。

### 3. 研究の方法

東南アジアにおけるケア実践とその社会基盤を明らかにするために、制度と実践の両面からケアを検討する。対象国は、タイ、フィリピン、インドネシア、シンガポール、ラオス、ベトナム、カンボジア。調査地においてケアとは何を指し、どのようなケア・ニーズをどのような場で、誰が担うのかを問いながら、文献調査と現地調査を進めてきた。メンバーは、各国で現地に関する知識も調査経験も豊富で、高齢者、出稼ぎ家族、育児、障害者など多様なケア・ニーズを支える社会の諸局面にすでに研究実績のある、経済学・社会学・政治学・歴史学・文化人類学研究者の学際的な編成により実施した。その研究関心は法制度、経済政策、医療と生命倫理、ジェンダーと親族、と多岐にわたるが、それにより制度と実践の広がり、家族やより広い社会の多局面から捉えることができた。メンバーは、それぞれ、調査内容として下記に注目してきた。

- A. 社会保障等ケアをめぐる制度政策の研究
- B. 具体的ケア・ニーズをめぐる実践、ケアする・される人々と社会の関わりの研究
- C. 未だケアの制度的輪郭が見えにくい中で現地の社会基盤の現状や変遷からケアの社会的基盤を明らかにする研究

そして各自の調査地で、まず、官公庁や現地図書館、団体、ジャーナリズムなどから基礎的資料を収集し、ケアをめぐる制度の把握・検証に勤め、事例とする特定のケア実践の場を定め、予備調査に基づいて論点を絞り込んだ。その上で毎年調査を遂行した。

また、全体活動としては、国内研究会を年2回ずつ実施し、調査進展状況を報告、情報共有と論点の相互検討を行った。特に2年度

目は、水俣において視察を兼ねた合宿を行い、中間報告による議論により、相互の論点を確認し共有することができた。最終年度の後半は、終了後に予定している成果出版のための発表会を実施した。

### 4. 研究成果 制度政策

社会保障制度は、高齢化の進行が最も著しいシンガポールと、それに次ぐタイでも、制度政策上はあからさまに家族とコミュニティに依存している。シンガポールでは、一方で、施設居住や、家族の住居と近接したデイケアの工夫なども報告された。一方タイでは、社会保障の整備は、歩み始めたばかりで既に財政的な困難が予想されており、そうした中で、「コミュニティ」への期待が大きい。行政は、既存の全国農村のコミュニティ保健ボランティアを応用し、高齢者対策としてのボランティアを任命する制度を立ち上げた。本共同研究でも、この制度が実際にどのように機能しているか、また、地方行政がどのようにコミュニティに関与しているかといった調査研究もなされた。これらの研究からは、公領域とされる行政の事業を、現場では実質的に民・協・私の領域が相互に乗り入れるように担っており、HIV感染者や高齢者をめぐり、ケア・ダイヤモンドや四領域で言われるような分割を当てはめると現状が見えにくくなるという点が私的にされた。ケアを巡って、フォーマル・インフォーマル、多層的なつながりが、動員されるのである。

#### 住まい方をめぐる規範：独りでいること・施設に住まうこと

期せずして、メンバーの多くが、ケアを必要とする人々の住まい方、中でも独りで住まうことをめぐる本人と周囲との選択やせめぎあい、あるいは施設に住まう選択などを追究した。タイ、ラオス、インドネシア、フィリピン、ベトナムいずれにおいても、一人で住まうことに対して、これを良しとしない規範があることが指摘される。しかしその一方で、同居（たとえば親子の）を当然視しない方向性も見られ、別居しながら近接居住してケアをするというパターン、あるいは、施設に入るにしても親類縁者の近くを選択する、など、住まいは分かちながらつながりを保つ工夫がなされるという形が増加していることが指摘された。ネットワークのように広がる東南アジアの関係性は、ケアの基盤として残っているが、多くの場合それはあえて同居を伴わないケースが増えているのである。世代関係や個人のスペースに関わる実践が変

化している。

#### 新たなコミュニティ

旧来の農村コミュニティ自体は人口の移動・流動により変貌しつつある中で、上からの「コミュニティ」言説とは異なる形で、新たにケアの基盤ともなりうる下からのコミュニティの形成も見られる。たとえば、旧来の仏教寺院をベースにしたもの、新たな中間層を中心とする宗教共同体、更に、国際的に広がる市民活動によるケアのネットワークの事例もとりあげられた。ケアを巡る上からのつながりが、下からの多層的なつながりの呼応を生んでいる( )一方で、こうした下からのコミュニティも生まれている。

#### ケアと文化・社会的基盤

東南アジアにおいて、他者をケアすることは、施しや積徳などの、現地の文脈で理解され、パトロン・クライアントとして特徴づけられてきた社会関係において実践される。ケアが人間の相互性に基づくものである限り、特定社会における社会関係の結び方やその変容に大きく規定される。

ただし一言で東南アジアといっても、社会保障制度の展開も、人口の動態、特に高齢化や移動の状況も、また社会・文化的背景も各国で大きく異なるなかで、国を横断する比較は、単に「進捗の相違」と断じられるものではない。そうした中で、本共同研究では、タイを対象とする研究が多く参加しており、東南アジアでも比較的社会保障制度の整備が進み、少子高齢化の進行も早いタイについて、多様な地域、階層、ケアの場を対象として、タイ一国をタテ割に、一定の厚みを持って把握することができ、ケアの社会基盤が多層的に展開していることの位置事例として確認することができた。

共同のパネル発表としては、2015年5月30日、日本文化人類学会第49回大会 大阪国際交流会館日本文化人類学会で、「東南アジアにおける高齢者の「新たな暮らし」とケアの価値と規範の変容」と題して本共同研究メンバーによるパネル発表を実施した。また、2015年12月13日には、SEASIA コンソーシアム第一回国際会議(京都国際会議場)にて、“Social Foundations of Care in Rural Southeast Asia.”としてパネルを組んだ。両学会ともに関心が高く、出席者からは盛んに質問や議論がなされた。いずれのパネルも多くは東南アジア農村部を舞台に言わばケアが「できてしまっている」状態(前者パネルコメントーター青木恵理子龍谷大学教授の言葉)をみており、後者パネルでは、バーバラ・アンダヤ ハワイ大学教授より、東南

アジアでも、より厳しい状況にある高齢者が増加している現状についてコメントがあった。本共同研究全体としては、都市や施設、仏教寺院などを調査地とするメンバーもあり、最終成果では、今少し多様な場面からケアを検討する所存である。これらのパネル発表を含みつつ、本研究終了後、2017年刊行を目指し、成果出版の準備を進めている。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計34件)

1. 江藤双恵、「タイにおける『地方の福祉』ナック・パッター・チュムチョンの役割を中心に」マテシス・ウニウエルサリス、17(2)、査読有(印刷中)
2. 清水 展「創造的復興とアジア市民社会の形成：フィリピン・ピナトゥボ山噴火で被災したアエタ支援の景観から」地域研究、15(1)、査読有、pp104-120(2015)
3. Shimizu Hiromu “Resilience to Turn the Crisis into a New Indigenous Community: Path to Creative Recovery of the Aeta”, 25 Year History of Recovery and Rehabilitation after Mt. Pinatubo Volcano Eruption, Japan Sabo Association, 1, 査読無, pp224-245(2015)
4. 細田尚美「フィリピン人帰還移民に関する一考察 - 再統合と高齢者介護の視点から - 」香川大学インターナショナルオフィス・ジャーナル、6、査読有、pp51-66(2016)
5. 古川 裕基「高齢化と多文化化が交錯する介護施設の現状 - 神戸市の介護施設グループホームCを事例に - 」京都文教大学文化人類学研究、9、査読有、pp1-31(2015)
6. 木曾恵子「ケアをするのは「誰」か - 東北タイ農村における女性血縁ネットワーク」多民族社会における宗教と文化、18、査読無、pp3-16(2015)
7. 岩佐光広「ラオス低地農村部の看取りの現場におけるケアの連鎖：子どもの現場への関わりに注目して」浮ヶ谷幸代(編)『苦悩とケアの人類学：サファリングは創造性の源泉になりうるか?』査読無(2015)
8. 伊藤 眞「インドネシアにおける高齢者の組織化 - 東ジャワ州の事例から - 」人文学報、498、査読有、pp12-29(2015)
9. 細田尚美(共著)「フィリピンの都市移住者コミュニティでみられる複ゲーム状況」杉島敬志(編)『複ゲーム状況の人類学』査読無、pp57-90(2014)
10. 吉村千恵「タイの地域研究に生きる障害者 - 親密圏から公共圏を創る」京都大学学位請求論文、査読無(2015)

[学会発表](計55件)

1. 速水洋子「東南アジアからケアを考える：北タイ山地における高齢者の居住形態の事例より」日本文化人類学会第49回大会、2015年5月30日、大阪国際交流会館
2. Hayami Yoko “Living together but

apart: reassembling relationships of care among Karen in the northern hills of Thailand”, IUAES Inter-Congress 2015, 招待講演, 国際学会, 2015年7月15日, Thammasat University, Bangkok

3. Hayami Yoko “Living together under separate roofs: changing practices of relatedness and care in a Thai Karen village”. Panel organized by Yoko Hayami “Social Foundations of Care in Rural Southeast Asia.”, 1st SEASIA Consortium Meeting, 国際学会 2015年12月13日 Kyoto International House

4. Yoshimura Chie “How PWDs are living in Thai Community: Learn from the formation of Care system with community health volunteer and their own activities.” Asian and Pacific Association for Social Work Education 23th Regional Conference, 招待講演, 国際学会, 2015年10月22日, Bangkok, Thailand

5. 馬場雄司「コミュニティのケア力：ナン県農村の地域づくりと外来者の宗教コミュニティのすれ違い」日本タイ学会第17回研究大会、2015年7月11日～12日、東京学芸大学

6. Baba Yuji “The Ability to Care of Community in the Tai-Lue village in Nan Province, Northern Thailand”, Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA) 2015 Conference, 招待講演, 国際学会, 2015年12月12日～13日, 国立京都国際会館

7. 岩佐光広「マゴ育てと老親扶養：ラオス低地農村部における高齢期の新たな役割とケアの価値の変化」日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日～31日、大阪国際交流センター

8. Mizuno Kosuke “Reform of the Labor and Pension Systems in Comparative Perspectives”, International Symposium on “Comparative Constitutionalism, Law, and Social Justice in Asia, 招待講演, 国際学会, 2015年12月3日～4日, Faculty of Law, Gadjah Mada University

9. 江藤双恵「出身地の福祉を担う地方自治体職員 - コンケン県農村部の事例」日本タイ学会第17回研究大会、2015年7月11日～12日、東京学芸大学

10. 江藤双恵「東北タイ、地域の福祉を担う女性の経験から」国際ジェンダー学会 2015年大会ご案内、国際学会、2015年9月5日～6日、東京女子大学

11. 加藤敦典「霊をケアする母親たち - むらでの独居を選択するベトナムの高齢女性」日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日～31日、大阪国際交流センター

12. Kato Atsufumi “Ideology of relatedness: Social pressures on the elderly living alone in contemporary rural Vietnam”, 2015 Asian Studies in Asia

(SEASIA) Conference, 国際学会, 2015年12月12日～13日, Kyoto International Conference Center, Kyoto, Japan

13. 細田尚美「流動的な社会でみられる親密性と公共性に関する一考察」日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日～31日、大阪国際交流センター

14. Hosoda Naomi “Overseas Filipinos: Retired and Back Home”, Southeast Asian Studies in Asia 2015 Conference, 国際学会, 2015年12月12日～13日, 国立京都国際会館

15. 合地幸子「老親扶養をめぐる規範を問い直す - インドネシア・ジョグジャカルタにおける高齢者福祉施設の事例から」日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日～31日、大阪国際交流センター

16. 直井里予「北部タイにおけるHIVをめぐる社会関係のダイナミクス - ドキュメンタリー映画『いのちを紡ぐ』の制作を伴う考察から」東南アジア学会、2015年5月30日、愛媛

17. 直井里予「北部タイにおけるHIVをめぐる親密な関係性の動態 - ドキュメンタリー映画『アンナの道』の制作を伴う考察から」タイ学会、2015年7月4日、東京

18. Baba Yuji “Relatedness and Belonging: The Tai Lue Community in Nan”, Paper presented at the 12th International Conference on Thai Studies, 2014年4月22日～24日, University of Sydney

19. Iwasa Mitsuhiro “Reconsidering the Traditional Postpartum Practices of Laos from Women's Experience, X ISA World Congress of Sociology, 2015年7月16日, Navios Yokohama

20. 岡部真由美「宗教をつうじたケアのかたち - 現代タイ社会における仏教僧による「開発」の事例より」国立民族学博物館共同研究会「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究 - 保育と介護の制度化 / 脱制度化を中心に」、2015年12月20日、国立民族学博物館、大阪

21. 伊藤 眞「インドネシアにおける高齢者の組織化 - 東ジャワ州の取り組み事例から - 」高度研究報告会、2015年3月3日、首都大学東京

22. 田村慶子「シンガポールの高齢者介護：家族主義型福祉レジームの行方」「老いを考える」プロジェクト研究会、2014年9月5日、国際高等研究所

23. 岩佐光広「居住形態の変化にみる老い - ラオス低地農村部の事例から」「老いを考える」プロジェクト研究会、2014年9月5日、国際高等研究所

〔図書〕(計22件)

1. 岩佐光広、世界思想社「第8章「ラオス低地農村部の看取りの現場におけるケアの連鎖：子どもの現場への関わりに注目して」

浮ヶ谷幸代(編)『苦悩とケアの人類学：サ  
ファリングは創造性の源泉になりうる  
か?』334(2015)

2. Kato Atsufumi, New York: Palgrave  
Macmillan, "A Concerned Mother of the  
Souls in the House: The Agency of  
Vietnamese Elderly Women who Live Alone in  
their Home Villages." In *Rethinking  
Representations of Asian Women: Changes,  
Continuity, and Everyday Life*.  
202(139-154), (2015)

3. Kato Atsufumi ed, Leiden: Brill,  
*Weaving Women's Spheres in Vietnam: The  
Agency of Women in Family, Religion and  
Community*. 244pp. (2016)

〔その他〕

国際研究集会(計1件)

1st SEASIA Consortium Conference panel on  
"Social Foundations of Care in Rural  
Southeast Asia", 2015年12月12日~13日,  
京都国際会館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

速水 洋子(HAYAMI YOKO)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号: 60283660

### (2) 研究分担者

吉村 千恵(YOSHIMURA CHIE)

熊本学園大学・社会福祉学部・講師

研究者番号: 00638190

馬場 雄司(BABA YUJI)

京都文教大学・総合社会学部・教授

研究者番号: 10238230

小林 知(KOBAYASHI SATORU)

京都大学・東南アジア研究所・准教授

研究者番号: 20452287

岩佐 光広(IWASA MITSUHIRO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文  
社会科学部門・准教授

研究者番号: 20549670

水野 広祐(MIZUNO KOUSUKE)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号: 30283659

岡部 真由美(OKABE MAYUMI)

中京大学・現代社会学部・准教授

研究者番号: 40595477

江藤 双恵(ETOH SAE)

獨協大学・国際教養学部言語文化学科・非  
常勤講師

研究者番号: 50376828

伊藤 眞(ITO MAKOTO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号: 60183175

加藤 敦典(KATO ATSUFUMI)

東京大学・教養学部・特任講師

研究者番号: 60613750

清水 展(SHIMIZU HIROMU)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号: 70126085

細田 尚美(HOSODA NAOMI)

香川大学・インターナショナルオフィス・  
講師

研究者番号: 70452290

LOPEZ Mario (LOPEZ MARIO)

京都大学・東南アジア研究所・准教授

研究者番号: 70527639

田村 慶子(TAMURA KEIKO)

北九州市立大学・法学部政策科学科・教授

研究者番号: 90197575

### (3) 連携研究者

直井 里予(NAOI RIYO)

京都大学・東南アジア研究所・研究員

研究者番号: 50757614

木曾 恵子(KISO KEIKO)

宮城学院女子大学・キリスト教文化研究  
所・研究員

研究者番号: 80554401